ヘレン・ケラーとアン・サリヴァンの関係を模倣する

アン・サリヴァンという女性をご存じだろうか？パーキンス盲学校の校長であるアナグノス氏によって、盲ろう者としてよく知られているヘレン・ケラーのもとに家庭教師として推薦された全盲の女性である。サリヴァンは経験に基づいて、指文字による教育から始め、ヘレンの知りたいことを教育と生活を近づけて、興味を引き立てながら知り得るすべてのものを、教え授けるようにした。ヘレンのなんとかして話したいという気持ちから、舌の位置を知るためにサリヴァンの口に指を突っ込むという行動もサリヴァンは受容した。また、大学教育を受けるために女学校に通うヘレンにサリヴァンは同席し、指文字を使った通訳をしていた。こうして、サリヴァンは約 50 年間、ヘレンに献身的に寄り添った。

このサリヴァンとヘレンのように、生涯ともに過ごすことができる関係は理想である。しかしながら、すべての人にこの関係が成り立つわけではない。障害者の支援は有償で、支援する人にも生活があるからである。財政的に継続困難で支援を提供する事業所がなくなるという事例を紹介する。同行援護という制度をご存じだろうか。これは、視覚障害者が外出をすることを保障する制度である。単独の外出が困難な視覚障害者に対して、外出する際に同行し、①移動の援護、②移動時や外出先において必要な視覚的情報の支援（代筆・代読を含む)、③トイレ・食事等の介護などのサービスを提供している。この同行援護はよく知られておらず、視覚障害手帳を持っている方のうち、同行援護を実際に利用されている方は 1 割にも満たないという状況がある。ヘルパーを確保する必要があるにもかかわらず、利用者がこのように少ないことから、経過措置の間に研修会を受講していなくて同行援護の事業継続ができなくなったのである。

福祉サービスは、当事者の声に基づき、多岐にわたって拡大しつつあるものの、情報が必要とする人に届いていないという現状がある。この問題は、多岐にわたって拡大する支援が、移動や家事代行など一つ一つ分断したものとなっているからではないか。そう考えたことから、サリヴァンとヘレンの関係を模して、同行援護という事業を軸に家事の援助といったヘルパーの仕事や福祉情報の提供をするケアマネージャーの仕事などを合わせて、連続的な支援が提供されるとよいのではないだろうか。

（966 字）

［1］ハーティサロン
「外出するためのサービス障がい者が外出するときに使える福祉サービスとは」
https://plushearty-salon.com/situation/service-contents-c/

［2］ハートネット
「何が変わった？同行援護」
https://www.nhk.or.jp/heart-net/shikaku/text/46613_03.html